

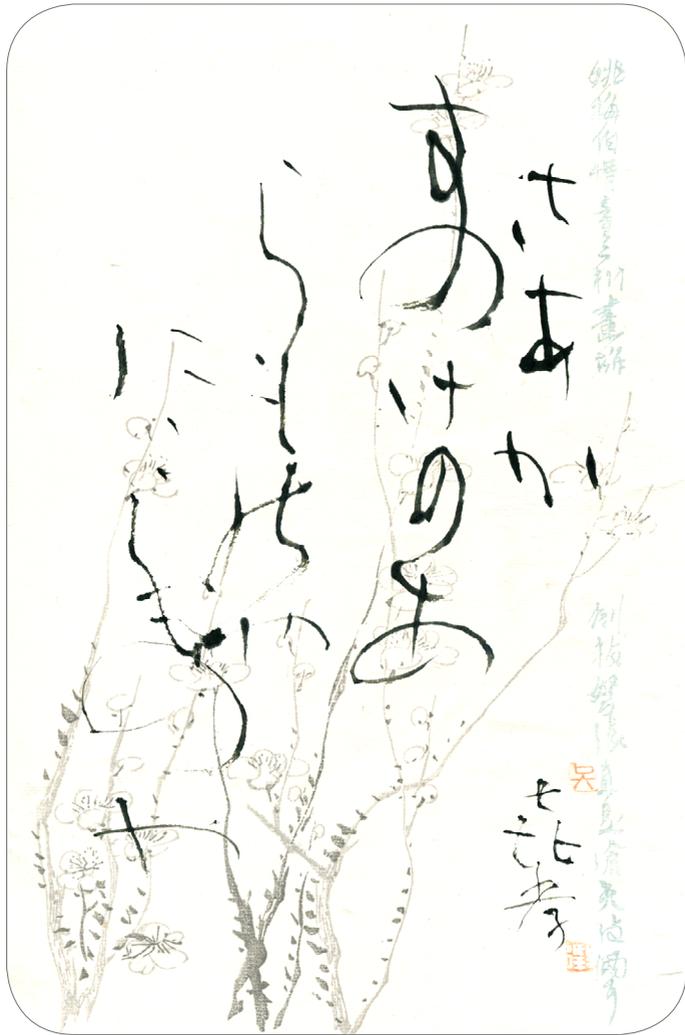
あそ

1

2012



スカイツリー



さあかすのけのあらものやにこものや
青寫眞

あそ

一月

中之島公園

佐藤喜孝

秋夕焼いつもの鳥とほりすぐ

秋の夕潮上にねるホームレス

疣筆海は音から昏れはじむ

それぞれに橋の黠りぬすがれ蟲

つづれさせあひおひばしはふたつ橋

夕月夜橋はむかうへ渡りゆく

流燈と大川端のビルともる



高島茂が句会でよく云っていたことに「この句は活字にすると収まる
好い句ですよ」と余り点の入らない
句に気づかひではなく何回も云はれ
た。茂は手書きの清記より確り活字
に収まった句姿を最終形としてお
た。私は短冊に書いた姿が最終と意
味もなく思つてゐる。短冊に前書は
まあまあとしてルビは全く似合はな
い、と決め込んでゐる。内容と不
致な口語表記も何故か美しくない、
現代仮名遣ひ表記は未完成だなあと
思った。しかしかなづかひも表現
の一つと云ふ時代になった。よいこ
とかだうかわからない。私は歴史
的仮名づかひは終生変はらないだらう
が、「あそ」の会員は各自考へてい
ただくことにした。



竹内弘子

臘梅にはや夕凍みのまつはれる
ばさと落つ折込ちらし花八手
掘割も塀もかたぶき猫の恋
食堂をありありとほる漱石忌
化粧せり老の初春迎ふべく
植込に落ちてゐたりし毛糸帽
小心を黒手袋につつまける

暮れ早し 田中藤穂

月光をなみなみ湛へ屋根瓦
木の上の人と話して暮れ早し
知らぬ子に手伝つてゐる数珠子採り
抱いてゐて嬰よく笑ふ秋日和
初鰯を捌く格闘技のごとく
茜雲ちぎれて飛ぶや感謝祭
凍蝶とみしがうごきて飛び立てり

旧年10月6日、30年ちかく住んだ浦和を離れて大宮のマンションに転居した。来々49歳になる長女が与野の貸家で生れて間もなく何度目かの抽選に当り、住宅公園の浦和田島団地に移った。もとは田畑が広がっていた十八号線沿いの大宮、フラザに越したのは六歳下の次女が三歳の時。

十年経って、雑種犬「カピ」を連れて浦和に戻り、初めて二戸建の家に住んだ。大宮、フラザから持ってきた梅の木を植えた。柿や石榴を植えた。狭い庭は「カピ」の犬小舎と小さい入れるといっぱいだった。
仔犬だった「カピ」は十七歳になっていた。二月の寒い朝、クスクスンの声に風邪かと思う間もなく近くの診療所へ連れて行つたが手遅れだった。長女も次女もそれぞれ家を離れたわたしたちはもとの二人になった。

三十パーセント

私の住む北区では毎年秋になると無料老人健診のお知らせが来る。受診して暫くすると結果が知らされるが今年も何所も心配はないとの事。とは言え自分としては何だかどこが悪いのではないかと言つ気がする。近所の奥様とその話をしたらばその奥様のお医者様の仰るにはどこも悪いところはないけれど体力は若くて盛んな時の三十パーセントだと思つてお暮らしなさいと言われたと。成程！そう思えば多少のふらつきや疲れ、頭脳低下、怠け、みな納得できる。その奥様より私の方が五つ年下だから私は三十三パーセント位かな。何だか急に気が落着いてしまつて清々しくなつた。皆さんに教えてあげたくなつた。

残る虫 長崎桂子

残る虫斜面の草叢伸び放題

残る虫足音途絶えたれば澄む

残る虫間をおき音階精一杯

爽籟や燃える入り日に明日託す

御手洗の細ぼそとして神無月

立冬や労る言葉掛合つて

下り坂帽子を飛ばす神渡し



早崎泰江

朝の陽に抽んでるなり石路の花

秋風に身をゆだねたき揺るる椅子

桜紅葉思はず一葉拾ひけり

見上ぐればほのかに匂ふ柚子たわわ

二階より夫の呼ぶ声富士の雪

病院の廊下せはしき白マスク

银杏黄葉ベンチに憩ふ老紳士

インフルエンザ

今年も四日市の広報に、インフルエンザの流行に供えてワクチンの接種をしましょう。の記事があり例年どおりの注意事項が書いてある。二〇一一年はいつまでも暑かったからもうその季節が来たのかと思うが、秋風が吹き爽やかな日になったとほっとしていると、又夏日に戻るので体調がなかなかよくなりなくて、微熱が続くとつい滅入ってしまう。

四、五年前に微熱があるのに予防接種をして風邪の状態が随分長く続いた事があるので、どうしようかとぐずぐず考えている。そんな或日の朝思わず震える寒さ。秋がなくて冬なのか。そして四日後平熱になった。ありがとつ。

我が家の近くにこの住宅団地では一番大きな公園がある。大樹がぐるりと取り囲んでいる。子供達の居ない平日の昼下がりは最も静かな一時である。

今は紅葉が美しい。特に银杏紅葉が耀いている。その一角にあるベンチに坐っている老紳士がふと私の目に留まった。なかなかお洒落な老人である。かつてイギリスに旅をした時このような公園風景があったことを思い出しなつかしむ一時であった。

山茶花

堀内一郎

足腰の見えて山茶花こぼれつぐ

天皇無帽大江戸線に黄落期

ベレー帽被りなほして銀杏黄黄

カナリアは歌を忘れて白いマスク

躑くもここまで紅葉してゐたり

御佛前靈前ふくろ年つまる

三月が目の前にある初日かな

枇杷の花

森 理和

松本の松田一向白侘助

草の絮行き交ふ他人へ手を振る子

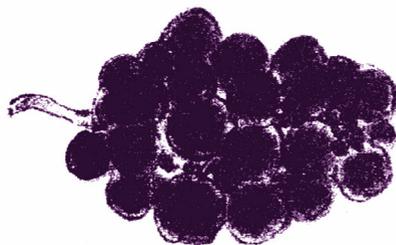
菊脛二輪小鉢へ浮かせ置く

海へ向きぼかぼか下る野水仙

潮騒や闇に浮かびぬ冬桜

島一つ浮かぶ海原枇杷の花

柁や喪中の葉書用意せり



「さあ！これから一日の至福の時だ」。一合五勺の晩酌をそう形容されるカフェの常連さん。カフェの出入口とトイレに小さな花を活ける。右向きでも左向きでも高くても低くても花の美しさが変わりはないけれども、花と器と私の息がピタリと合うまで時間も忘れてしまふ。私の至福の時に違いない。誰に気遣う事もない時がそこにある。十一月五日の堀内一郎ハーモニカ演奏会はカフェ傳には至福の時だった。古里を思い起すその音色に今年は誰の心にも特別に響いた事でしょう。何日も前から落ちつかず初体験と謙遜の一郎さんに至福の時と言えたかは分かりませんが、大切に抱えておられたバックから何本か机にハーモニカを並べ次にノートを出されました。頁を繰りつつ幅広い選曲がカフェを小川のようにながら流れました。最後の曲は「ふるさと」でした。



吉弘恭子

秋の風吉原大門考の影

紅殻が指から落ちぬ冬日中

秋の蚊をとらへてくれむ掌

秋燈指紋ひとつもない辞典

初おろし父のすげたる日和下駄

高空に透けてゆくかよ秋の蝶

家中をとりこにしたりラ・フランス

富士 赤座典子

ほろほろと白山茶花や富士遥か

冬の庭富士見の足湯賑へり

富士を背に白き躑躅の返り咲く

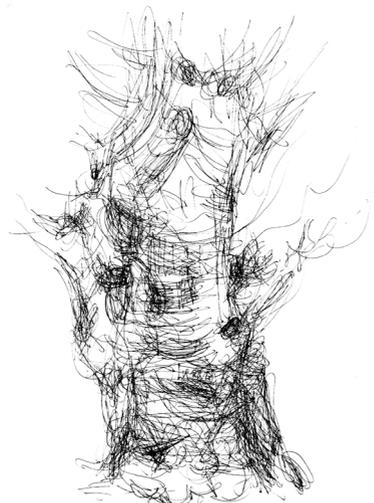
離れ家の雪見障子は軋みけり

小春かな半纏の人富士を撮る

蒲団から富士眺めをり温温と

冬曙富士にひらひら茜雲

—アフリカ・タンガニク湖に住む熱帯魚「ロトンディベントリス」体長五センチが五百から三千匹の群れを作る。その群れの中にいて雌が口の中で十個の卵を孵化させる。稚魚が9mmぐらいまで育つと一部を雄に渡しそれだけで口の中で十五mmぐらいになるまで育てる。私だけかも知れないが魚を見ても余り違わなく見えてしまふ。(同じ種類の魚) 京大動物生態学研究室の研究員の方々が稚魚72匹の親子関係をDNA鑑定した。その結果雄も雌も決まった相手との実の子だけを育てていたとのこと。普通一夫一婦制の魚は群れを離れて二匹だけですむ。群れの中ですむこの魚はどのようにして配偶者を見分けているのだろうか。朝日新聞の記事を読んで興味を覚えた。果たして人間は顔も形も同じような中から自分の配偶者をしっかりと見極められるのか。足の指だけで自分の夫をわかり得た人がいたが人間の素晴らしい感覚を自慢したくなった。果たして私には持ち合わせていないように思うが。生きているもの全部にそれぞれ素晴らしい特性を持ち合わせているものだと改めて感じ、生きていることの楽しさに感謝してゐる。



赤とんぼ 遠藤 実

小春日や海賊船は湖を走り
水戸藩の屋敷の跡や冬紅葉
時雨るるや鉦彫仏の罅深し
鍋奉行聞き手は多弁な妻が居て
借景は富士山として懸大根
思ひきり泣けて幸せ赤とんぼ
渡り来てその日夕鶴となりにけり



大日向幸江

朝北風に体操仲間肩を組み
カシミヤの毛布に嬰のやすらかに
上州の冬は寒いよ樽太鼓
初時雨駅より相合傘となり
冬草に横坐りせる茶虎猫
鍵盤を跳ねる指先シクラメン
藪柑子中に仔猫を隠しをり

ふと考えてみると私の生活に変わった事があるとしたら、朝の散歩でかならずスカイツリーを見上げる事でしょう。小生の自宅から東武線で駅一つ先に、六百参拾四米のスカイツリーが、完成間近の姿を現して居る。完成は来年の五月頃と聞いて居る。三月十一日の地震にも耐え、科学の力の偉大さをさまざまと見せつけて居る。平和のシンボルとして平生の文化のシンボルとして、未永く耀く事でしょう。

小生のスカイツリーを見る目的は、今日の天気を見る事である。ツリーの上の空を見て居て毎日刻々の景色は変り、風の吹き方温度の変化もあり、むずかしいけれども自分なりに天気を予想して愉しんで居る。





鎌倉喜久恵

括りたる枝の炎や萩供養

紅葉はき紅葉を焚くや寺男

紅葉かつ散る今年は遅いと言はれつつ

昔風砂糖二キロの歳暮くる

きぬかつぎつるりと剥いて憂さ捨てる

江の島へ灯の渡りゆく秋の海

老眼のすすんだらしき月けぶる

初冬 木村茂登子

渋皮をのこし小布施の栗を煮る

冬仕度かすかな怯え抱きつつ

将軍の采配いかに冬立てる

梅檀は双葉より芳し七五三

冬空の店の青さを仰ぎ見る

神苑に献花の鉢音冴えて

ちやんちやんこおでんちといふ京ことば

築三十五年という古いアパートに住んで十六年になる。部屋は三つ、

縦に並んでいて、一人住まいとしては狭いというか、充分というかは考へ方次第というところである。逗子の駅から十数分の所という割には周りの景色が変わらず、川あり山ありで住み心地はよい。アパートの大家さんは徳富蘇峰の孫で敷地内に剣道場を設けていて、土・日には竹刀の音が響く。

家から海までの途中の橋は東郷橋という。東郷元帥の別荘があったところである。海まで出ると浪子不動の小さな社があり目の前の海中には「不如帰」の浪子碑が波に洗われている。

山の中腹には蘆花公園があつて徳富蘆花の旧宅が郷土資料館になっている。町の中には歴史を感じながらのんびり暮らせる所である。

ことば

以前近所に京都出身の奥さんがおられた。

「お豆さん炊いたのいかが」と煮豆をいただいた。「豆」にさんをつけるのが面白かった。

子供さんのちゃんちゃんこを可愛いと云ったら、おでんちだと云ふ。私が可笑しいと笑ったらちゃんちゃんこの方が可笑しいと笑った。

「かっつる」が、借りてくる、「こつてくる」が、買ってくるのとこと、戸惑うこともあった。

姉と妹と三人で嵐山に旅した時のこと、女の方に道を尋ねた。

「この道のどん突きを左に曲つて」と教へられた。

京都に来て女の方から「どん突き」といふ言葉を聞くととは、とあとで三人で大笑いした。

返り花

篠田純子

かへり花引つ越す街の植込みに

マロニエのうすももいろのかへり花

汐入川うろこの剥げた鯔一尾

トラックの巻き上げる風秋の蝶

変装をしなくても魔女ハローウィン

原爆なら何個と愚問にこり酒

いてふもみぢ気取って食べるスパゲティ

柚子

定梶じょう

残る虫さうかもうすぐ一周忌

死は条理生は不条理桃剥けば

むかご摘むたうべて詩囊こやさむと

盗みたる柚子ゆふぐれの手に点る

干しいもを焼くこの時間愚かならず

あけてみるつかはぬ机の抽斗

しぐると船名あればキリル文字

十一月二十一日、談志が逝った。
平成十九年九月の根津神社の祭
で、偶然談志を見かけた。住いの、
マンションの一階の八重垣煎餅の店
の前に腰掛けて、神輿が通るのを
待っている様子だった。思い切っ
て、声をかけてみた。以前からフア
ンだと告げると機嫌良く、二言三言
を交わした。テレビで見ると同じ
調子だが、やや易しい感じをうけた。
「写真を撮ってもいいですか？」
と聞くと、いつものポーズを取っ
てくれた。



根津の夜神輿を見ている談志を見る

純子

平成19年9月15日撮影

母、長姉、長兄が各々句誌に投句
しており、次兄は、昭和二三年虚子
が初めて能登入りした時それを迎
えたうちの一人、当時廿才だったと
いう。但し、私が俳句を始めたのは
それらと関係がなかった。帰郷して
数年の中断の後再び句作りを始めた
のには彼らの影響があったが、俳句
の話は余りしなかったと思う。俳句
の傾向が違っていた。だから、実家
での句会には参加したが、吟行はほ
とんどひとり。

そんな折作った句へ鵜はいつも一
羽波にのり波潜り。さてこの句を
どう仕立てなおそうか、と歳時記の
例句を参考。

波にのり波にのり鵜のさびしさは

山口誓子

句作りの再開を後悔したことだっ
た。



芝宮須磨子

青空の広き坂上深む秋

自分史の加ふ祝ぎごと秋澄めり

お誘ひの電話に秋が通りすぎ

晩秋や遠くの人と長話

立冬の木の間の光まぶしめり

付きそはれ新宿の街冬気配

冬兆す最終章のページ繰る

荒 星 須賀敏子

行く秋や少し長めに映画観る

さくさくと百個ばかりを干柿に

野仏に菊たつぷりと高麗の里

荒星の中の一つや談志逝く

手水鉢白い山茶花浮かべけり

小六月暫し鴉と睨み合ふ

貼りかへし障子の隅に日付書く



見える

五年程前より白内障の診断を受け様子を見てきたが、今年に入り太陽が一段と眩しくなり、車のヘッドライトは花火の如く耀く、新聞や本がとてみづらくなり、症状の重い左眼の手術を決めた。家から歩いて十分程の眼科医院で、日帰りで手術を受けた。説明どおり手術は十分程で終わり、痛くもなかった。

翌日検診のため眼帯を外した瞬間春霞の空はクリアな秋空に変わった。

自宅に戻り眼帯をそっと外し鏡を見た。そこには見慣れぬ恐ろしい顔があった。満天の星の如く、顔一面に散らばったシミ、そして深い皺。はつきり見えない方が良いこともあつたのだと知らされた一瞬だった。

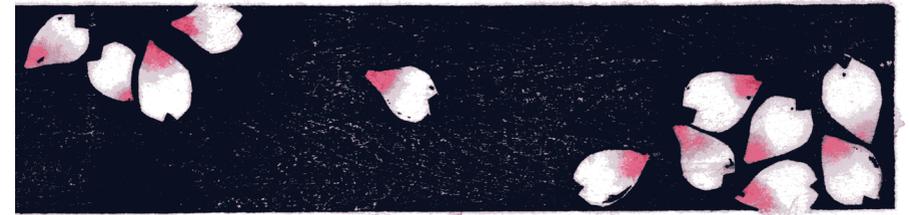
前月作品

飛鳥から文の届きし富士に雪	外人に席をゆづられ秋涼し	諍ひの夢残りをり椿の実	ただ歩くことの幸せ涼新た	白萩のしなやかに揺れこぼれ花	尻に手を添へれば温し残り茄子	養生訓囃むごとく讀む秋灯下	金輪際本音は吐かぬ冬瓜汁	新蕎麦や外人さんがたべてはる
吉弘恭子	渡邊京子	赤座典子	遠藤 実	大日向幸江	鎌倉喜久恵	木村茂登子	篠田純子	定梶じょう

喜孝抄

一人一句

何もかも吸ひ込んでゐる秋の空	翅乾き高見へ一気赤とんぼ	年鑑は句のしかばねや秋ともし	秋風や遠き山々呼び寄せる	鰯雲流れは速く波立てり	捨てる捨てない秋風に訊いてみる	誰も来ぬひと日金木犀まみれ	馬鈴薯の土も美味しく見えにけり	冬瓜を生みおとしたるおばばかな
山莊慶子	森 理和	堀内一郎	早崎泰江	長崎桂子	田中藤穂	竹内弘子	須賀敏子	佐藤喜孝



浮世絵のをみなをのこもをなもみを 佐藤 喜孝

俳句の世界に膾炙している

昼顔の見えるひるすぎぼるとがる 加藤郁乎

がありますが、この句、実体は昼顔のみ、ほかの言葉は音が欲しいために置かれた。ことばの、音と義のうち義を捨てさつて音のみを拾つてなつた句。一句を読みくだして冒頭の「昼顔」に返ると、昼顔の実体がかげろうのように曖昧になるのは、そんな故でしょう。そして作者の加藤郁乎はそんな処を狙つてこの句をものにしたに違いありません。詩に軸足を置く作者にとつて、写生だの即物具象だのは嘲笑の対象にしかならなかつたでしょう。

そして喜孝さんの一句。浮世絵も、女男もおなもみも実体のあるもの。ですが、その構造は郁乎句と殆んど等しい。上五の措辞から中七が引きだされ、

その音から座五が導きだされる。意味よりも音が優先されているのです。固より、根つからの俳人喜孝さん、郁乎句ほどの広がりはなくとも、俳句の必須条件といって良い諧謔ある句をものにしたのです。想像してみて下さい。おなもみが役者絵の役者の胸についている図を。そして「見返り美人」図。ふり向いているのは、その裾にくつついている草風のたぐいを見ようとしているところなのです。そうに違いありません。

しはの身にまだ炎えるもの捨鶏頭 遠藤 実

言葉の頭に「捨」の字がついて、イメージの良くなることは少ないが、句歌の世界では「季節にはずれた」という意味になるようです。「捨鶏頭」もそうでしょう。しかし、草花に「捨」が接頭すること「捨て苗」などの他あまり見ないと思うのですが、「捨鶏頭」は充分納得しうる措辞。うまい言葉のみ

つけたもの。ただ上五「しはの身」が耳に馴れぬ言い様。実さんが、いやよくつかうんですよ、と仰有るなら撤回しなければなりません。まあ、その程度の物言いととつて頂いて宜しいのですが、「皺」を動詞化した「皺む」があること、もし参考になれば。

してみごとな一句。

行く舟を犬と見てゐる秋の夕 山莊 慶子

もう昔のことになります。私は『雲母』に投句しております。ある年の号に

夕闇をつらぬく秋の岬かな 飯田龍太

目葉や秋の空より拡大す 篠田純子

デフォルメということばが美術用語として多用されだしたのは二〇世紀冒頭前後らしい。正岡子規は知っていたかどうか。対象を変形拡大して表現する意味につかわれだしたそうです。で、掲句。「秋の空より拡大す」は、まさにデフォルメの技法。点滴された目葉があたかも、秋空から落ちてきて眼窩にとどくまでにだんだん大きくなってくるようだという、その瞬間をとらえた句なのです。「拡大す」は、「拡大して落ちてくる一瞬」の意。芸術一般にデフォルメはありふれた技法でしょうが、句歌には多くない。言葉の少なさが原因しているのでしょう。純子さんの句は、そんなニツチを埋めてくれた。大胆に

が発表されていて、ただただ私は驚きあきれたのでした。平生から岬を見て暮らしている身にとり、あたりまえ過ぎる実景。そこから先の状況を表現するのが詩ではないのか、と。しかしです、四季の岬を見ているうちに、「夕闇をつらぬく」と言い得るのは秋しかないのに気づいたのです。他の季節よりも岬が細くさえ見えたのです。ことに晩秋はそうです。龍太の言う、「感じたことを見たものにする」、それが写生である、と言う言辞は、こんな句のためにある、とさえ思ったことでした。さて慶子さんの一句。じつに／＼素直に見て表現されていて、一切技巧はない。句会では見逃され

てしまいそうな句です。ですが、どう感じたか、を言わず見たものに素直に従った。句はかく詠みたい、しかしなかなかできない。

飛鳥から文の届きし富士に雪

吉弘 恭子

「富士に雪」とありますから、富士の初雪でしょうか。そうでなければ「富士の」とある筈。今月号では恭子さん、固有名詞にこだわっていらっしやるようです。竜飛崎や美幌も読みこんでいる。ふしぎなことに、片田舎に育つ私でも「飛鳥」と聞けば懐かしさを覚える。日本人の血である、とある人もいました。然もありなん。そして初雪をかぶった富士の見える住まいに手紙が届いた、と。五七の上句と「富士に雪」のあいだに断絶がありそうでない、なごそそで省略がある。うまい句だ。

鎖場にリュック下ろして鱈雲

渡邊 京子

「鱈雲」が利いている。登山の岩場。一般の人も

に鎖道になっているのでしよう。背のリュックは下ろして、身一つで頂上へ向かう。仰げば鱈雲。なんともすがくしい。

虫の音のますます間近眠れぬ夜

早崎 泰江

虫しぐれ。更けるとともに耳がさえて、間近に聞こえるいよいよ眠れない。鑑賞文を書けばこんな処でしょうか。掲句しかし、中七が説明に近いのが惜しい。一句として成りたつためには、切れの間、省略があることが必要ですが、「ますます間近でそのために眠れない」と読めてしまうのです。

万葉の時代の大伴旅人の歌に「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」があります。本歌取りになるようですが、これを利用して、「虫の音のいよよますます」などとしたら？勿論この形の方がいいとは保証できませんが。

これから先のこと白菜を漬けてある

堀内 一郎

私の先輩の方が友人に誘われて、創刊間もない結社誌に参加することになった時。どうも成績がよろしくない。創刊号を読む機会があつて、そこには「原則として破調字余りの句はとりません」とあつたそうです。一体に破調句の多い先輩はそれで納得した、といいます。そして掲句。破調も破調、大字余りの句。ですが、披講上手はこんな風に読みあげます。

これから先のこと白菜を漬けてある

要するに、定型と同様、四分の四拍子三小節の譜とするのです。自由律でも、人口に膾炙している句は、おおよそのリズムに収まることが多い。

さて、上句の「これから先のこと」。深刻にとる必要はありませんが、こう気負いのない言い方をされると、逆に正から負まで、いろんなイメージがかけめぐるので。鑑賞の枠が広がるのです。関西弁ではこんな時、「かな（わ）んなあ」という筈。

何とも朴直まつ正直な仰有りようです。たとえ少しであつても、敬愛すべき母上を疎んずるのですから。そしてもしかしたらこの句、作者ご自身が咳いた時に不意にできた句ではなからうか。自分が咳いた時、あゝ母もそうだった、と。咳く自分をうとむ気持が、あゝ母の時もそうだった、と。

表現の冷静さが私にそう感じさせるのです。

咳くときの母をすこしく疎んずる

竹内 弘子



歳々年々人不同

ひとつだけ童のちゑや年の朝 為谷

為谷の句は『春興 かすみをとこ』（涼袋編 明和2年）に出典するもので、作者の為谷については、不明である。句前の「歳々年々人不同」は初唐の詩人劉希夷「代悲白頭翁」に由来する詩句である。劉希夷の代表作なので、敢て全文を次に抄録する。

洛陽城東桃李花、 洛陽 城東 桃李の花
飛來飛去落誰家。 飛び來り飛び去りて 誰が家にか落つる
洛陽女兒惜顔色、 洛陽の女兒 顔色を惜しみ
行逢落花長歎息。 行く 落花に逢ひて長歎息す
今年花落顔色改、 今年 花 落ちて 顔色改まり

明年花開復誰在。 明年 花開きて 復た誰か
已見松柏摧為薪、 已に見る 松柏の摧かれて薪と為るを
更聞桑田變成海。 更に聞く 桑田の変じて海と成るを
古人無復洛城東、 古人 復た 洛城の東に無く
今人還對落花風、 今人 還も對す 落花の風
年年歳歳花相似、 年年 歳歳 花 相ひ似たれども
歳歳年年人不同。 歳歳 年年 人 同じからず
寄言全盛紅顔子、 言を寄す 全盛の紅顔子
応憐半死白頭翁。 応に憐むべし 半死の白頭の翁
此翁白頭真可憐、 此の翁 白頭 真に憐む可し
伊昔紅顔美少年。 伊れ昔 紅顔の美少年
公子王孫芳樹下、 公子 王孫 芳樹の下
清歌妙舞落花前。 清歌 妙舞 落花の前
光祿池台開錦繡、 光祿の池台に 錦繡を開き
將軍樓閣画神仙。 將軍の樓閣に 神仙を画く
一朝臥病無相識、 一朝 病ひに臥して 相識る無し
三春行樂在誰邊。 三春の行樂 誰が辺にか在る

宛転娥眉能幾時、宛転たる娥眉 能く幾時ぞ
須臾鶴髪乱如糸。 須臾にして 鶴髪 乱れて糸の如し
但看古来歌舞地、 但だ看る 古来 歌舞の地
惟有黄昏鳥雀悲。 惟だ 黄昏に鳥雀の悲しむ有るを

人生の儂さを白髪頭の老人の嘆息に託して見事に表現した名詩として広く知られている。詩中の「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」を、藤原公任は『和漢朗詠集』の巻下「無常」に採録したが、宋之問の「有所思」として収録されたのである。

為谷は劉詩の「歳歳年年人不同」を生かして、「ひとつだけ童のち糸や年の朝」と歳旦の句を詠み得た。年が改まって、童もそれだけ一つ知恵がついてくる。正に唐詩の詠まれたとおり、「歳歳年年人不同」そのものである。

『和漢朗詠集』に収録されたこの名句を、多くの人々は享受したであろう。近世の俳人たちもこの千古の名句を愛読し、またそれを生かした俳句を多く詠んだ。例えば、

歳々年年人不同
顔見せや錦を常磐の雪の松 莊丹
年々歳々春相似たり

歳年やおなじ呼名を家の春 紫陶

年々歳々花相似
年々の花に同じき顔もなし 正岡子規

因みに、藤原公任の『公任集』に、
昔みし花の年年似たれども同じからぬを思ひしらなん
の和歌も見える。

『古今集』には、紀友則の次の和歌も載せてある。
色も香も同じ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

年々歳々夜空眞赤な震災忌 高島 茂
歳々に老ゆるきびしさ瀧氷る 橘 澄男

等々力溪谷・野毛大塚古墳

篠田

純子

冬日差し亀か岩かとしばし論

溪谷をひたすら登る冬の猫

冬日差し崖を割りつつ大樹の根

Aグループの鴨Bグループの鴨

鴨一羽口開けてゐる川瀬音

それぞれの鴨のグループ関はず

万華鏡めく冬の日の瀬に飛んで

冬の滝痛き音なりひびくなり

不動への石段けはしはつ紅葉

横穴古墳かがんで覗く落葉の香

冬うららもぐらのかへす土ふはり

花八手弁天池に水の無く

少年野球のコーチの叱咤冬薔薇

円墳の頂上からの小春かな

仲良しが寿司屋で笑ふ小六月

あとがき 母が口癖のやうに言っていたことわざが二つあった。ひとつは「好き連れは泣き連れ」。調べると「好きで一緒になった夫婦は、どんなにつらいことがあつて泣いても、なんとかやっついていくものだ」というのが本来の意味とわかった。母は意味を取り違へて恋愛結婚は失敗すると受け取つてゐたやうだ。もう一つは「怠け者の節句働き」である。これは私のためにあるやうなことわざである。年頭と秋祭はゆつくりしたことがない。他の月にももう少し分けたいと思ふ。これは遅刊の言い訳の枕です。血圧が少し高いが飲食に関してはすこぶる順調で餅や数の子で新年を祝つた。遅刊はただただ生業に逐はれたと云ふことです。お許し願ひたい。

各人の俳句の下欄の文章が句を生き活きさせる効果があると某氏に云はれた。忙しくて書けない人も気張らず日常の事柄や心に残る映画や本の話など思ひつくままお書き下さい。写真・カットなどもお待ちしています。

長い間続いた「七座句会」もひと休みすることにし

ました。七人で始めたので句会名を七座(北斗七星)としました。この句会は飲食をしながらと云ふ珍しい句会でした。一献傾けると句がよく見えてきて楽しくなります。余り飲めない方も飲んでくださいました。恭子さんの手作り料理・理和さんの漬物は句と同じくらい楽しみなものでした。そして句会にはいろいろな人が応援に来て下さいました。特に八田木枯・阿部寒林・大山夏子諸先生には毎月来て頂き感謝で一杯です。又季候が良くなったら再開したいと希望してゐます。(喜孝)

二〇二二年一月号

発行日 一月二十三日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090・98228・4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹徳房

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130・655526(あを発行所)
表紙・佐藤喜孝
乱丁・落丁お取替えます。